

# しわの寄った五千円札

中村康志

「おい、大丈夫か？」

対向車線の右前方に高校生ぐらいの男の子と自転車が倒れている。

それはつい先日、職場から帰宅途中での出来事だ。僕は乗っていた車を停めて、急いで駆け寄り声を掛けた。

「大丈夫です。転んでちよっとびっくりしたけど」

当て逃げされたらしい。

「身体は？ けがしてないか？」

着ていたダウンジャケットが少し破けていたが、けがはしていないようだ。

「よかった。それじゃあ、気を付けてな」

「ありがとうございます」

帰りの車中で考えていた。他人にまったく無関心だった昔の僕なら、間違いなく見て見ぬふりをして立ち去っていただろうな、と。

そう、あの事件があるまでは……。

あれはもう二十年以上も前のことだろうか、ある年の大晦日の夕刻、僕は香川県の高松港に降り立っていた。フェリーを降りると、栈橋にはかなり強い潮風が吹き込んでいたが、その年はかなりの暖冬でそう応えるほどではなかった。

その頃の僕は、長期休暇のたびに当てもなく気ままな一人旅を決め込んでいた。その時高松を訪れたのも、地元の大坂南港から乗ったフェリーがたまたま〈高松行き〉だったからだ。

港を出た僕は、夜の街に練り出すのが楽しみで、早々に近くのホテルに飛び込んだ。

とは言っても地方都市の大晦日の夜である。

(満身に飲み食いできる店は開いているのだろうか)

不安ながらもホテルの従業員に入念に聞き込んで、いざ出掛けようとした時、ロビーの大型テレビが「紅白歌合戦」の開会を宣言した。すると、それが耳に入った途端なぜか突然、僕は焦燥感にも似た胸騒ぎに掻き立てられた。

(虫の知らせか、何だこの妙な気分は?)

俄の憂鬱に戸惑いながらも、僕は目的の街に向かってとぼとぼと歩き出した。思っていたより結構な距離に心細くなりかけた頃、前方に繁華街のネオンらしきものが見え始めた。いくら暖冬だとは言え、この時間になるとさすがに真冬並みの冷たさで、僕はそそくさと〈赤ちようちん〉の暖簾をくぐった。

店内には地元の常連と思しき客が二組、テーブルに陣取って「紅白歌合戦」に見入っていた。他に誰もいないカウンターのど真ん中で、僕は目の前の黒板に書かれた聞き慣れぬ言葉の数々にわくわくした。特に、メ鯖の切り身と大根を酢味噌で和えた「てっぱい」や、菜っ葉と豆腐や薄揚げを炒めたような「まんばのけんちゃん」などは、その名はもちろん見た目も味わいも初めてのものだった。

土地の料理を肴にお銚子を二本も空にした頃には、先ほどの憂いなどどこ吹く風。僕は手のひらを返したように解放感に浸っていた。

すっかりご機嫌になって、そのまま何軒か梯子酒。最後は呼び込まれるままへお姉ちゃん(の店)で大騒ぎして、気が付けばホテルのベッドで元旦の朝を迎えていた。

案の定財布は空っぽ、ズボンのポケットに小銭が残っているだけだったが、僕の旅路には「さもありなん!」であり、悠長に構えていたのにもちゃんと理由があった。たとえばそれが旅先であっても、一旦飲みに出ると財布にあるだけ使ってしまった僕は、あらかじめ旅行鞆のサイドポケットに3万円ほど忍ばせていたのだ。

そう、忍ばせていた、はずだった。

高松独特である餡餅入りのお雑煮に、目を丸くしながらもホテルの朝食を済ませ、部屋を出ようと鞆を提げた正にその時、昨夜の胸騒ぎが瞬時に蘇った。

なんとサイドポケットのチャックが開いていてではないか!

それが何を意味するのか認識するのに時間は掛からなかった。往路のフェリーでの光景がパノラマ画像のように頭をよぎり、驚くほど潔くあきらめの境地に至った。乗客が少なかったこともあり、乗船中鞆を置いたまま何度か席を離れていたのである。

あの胸騒ぎはこの結末を暗示してのことだったのだろうか? それとも僕自身が潜在意識の中ですでに察知していたのか? どちらにしても後の祭りである。

(仕方ない、キャッシュコーナーでお金下ろすか)

ホテルは追加料金もなく無事にチェックアウトできたのだが、本当の窮地に追い込まれるのはここからだ。すぐに敷地内のキャッシュコーナーに向かったのだが、あろうことか、そこで僕が目にしたのは「休止中」の文字だった。張り紙には三が日は利用できない旨が記されている。ようやく自分が置かれた現実を思い知らされ、その場に立ち尽くす他なかった。

茫然自失としながらもとにかくホテルを出た僕は、どうにかしてこの危機から逃れられないものかと、必死で知恵を絞りながら街をさまよった。どれ位歩いただろうか、やっとの思いでひねり出した策は、着払いでフェリーに乗せてもらうことだった。早速公衆電話を探して大阪の友人に電話を掛け、到着地の大阪南港で待機してもらおうよう頼み、急いで高松港に向かった。

乗船口の受付で事情を話すと奥の事務所に通され、所長らしき人が対応してくれたのだが、話はそう甘くはなかった。前例がないからとあっさり断られ、かなり粘ったのだが頑として聞き入れてもらえず、結局最後までその所長が首を縦に振ることはなかった。再び窮地に立たされた僕には、手段はもう他に浮かばなかった。

失意のどん底で乗船所のベンチにへたり込んだ僕は、何をすることもなくただただ床を眺めて座っていた。

「あんた、どうかしたの？」

顔を上げると、見回りの途中なのか、初老のお巡りさんが僕の顔を覗き込むように立っていた。知らない土地で有り金全部無くした男の面は、相当しよぼくれていたに違いない。気が付くと、僕はそのお巡りさんに事の経緯を全部話していた。

「よっしゃわかった。わしが話付けちやる」

意気揚々と事務所に向かって歩き出したお巡りさんの背中に、一条の光を見いだした僕は後に続いた。

しかし、またしても希望は打ち砕かれた。乗船事務所の所長は、お巡りさんの言葉にも一切耳を貸そうとしない。立场上あまり強くも言えないのだろう、ばつが悪そうに引き下がったお巡りさんに、僕は「ありがとうございます」と、深々と頭を下げた。結果はどうであれ、僕には彼の頼もしさとやさしさが純粹にうれしかった。そしてもう一度会釈をして、その場を立ち去ろうとすると彼は言った。

「付いて来なさい」

高松警察署に戻った彼は、「この用紙に名前と住所、電話番号を書いて」と、一枚の書類を僕に差し出した。言われるがまま書き終えたその紙切れと引き換えに、お巡りさんが僕に手渡したのは、少ししわの寄った五千円札だった。

「警察署は貧乏やから、家に帰ったら絶対すぐに返してや」

思いも寄らず、僕の日からは大粒の滴が流れ落ちていた。

それが警察官の公務だった、と言えばそれまでだろう。だが、ベンチでうなだれている観光客など見過ごすこともできたはずである。僕はその時、確実にあのお巡りさんの懐に触れた気がしたのだ。

## しわの寄った五千円札

それまで意識することなくやり過ごしてきた人のやさしさを、改めて考えさせられたこの経験は、他人に全く興味がなかった僕に変化をもたらした。

あれ以来、困っていきそうな人を見れば、勇気を持って声を掛けるようにしている。

あのお巡りさんが見えていくくれる気がするから。